

蓮岡修 「涸れる井戸を掘る」――現地活動報告 今後の展開とまとめ

現地では今年（二〇〇一年）に入っても山の雪の量は増えず、今年の夏から来年の春にかけてまた大規模な早魃が予想されている。現在、ジャラバード市のメインオフィスを中心に、ロダット、ダラエ・ヌールと三つのオフィスを構え、難民流出を食い止めるべく作業に邁進しているが、自然の力は大きく、我々のごく僅かな力ではその4割程度を抑えられたに過ぎない。水不足に苦しむ農夫達がしたためた陳情書は、今でも絶えることなく事務所に届けられている。

今後、我々の活動は再度の拡大期に入り、綿密な調査によって無駄を省いた効果的な配置での井戸づくりに努め、すこしでもコストを抑えてより多くの井戸を手がける。そして今年の終わり頃からは、住民達への教育、道具管理や役割任命などの教育期に入る予定である。

教育期では、住民達に井戸が涸れた場合どのように再生するかを実地で教え、その際に必要な道具類の貸し出し方法、ハンドポンプ等の管理維持の仕方などを長老会議及び政府の関係者立会いのもとで決定する。

PMSでは撤退時に政府の管理の下必要な道具類を村の責任者のもとに置いていくことを明言していた。これを使って再生ができれば、住民達は不要な外国勢力に頼らず誇りを持って自分達の井戸を管理できることになる。早魃が続けばまた涸れる井戸はでてくるであろう。しかしこのシステムが確立されきちんと機能すれば、村の財産の一部となった井戸は、他のNGOが莫大な賃金を業者に払って掘らせた再生不可能なボーリング井戸が涸れた後でも、必要なだけの水位は確保されるはずである。二年後か三年後訪れるであろうその時のことを予想して、我々は今できるだけ再生可能な井戸を残そうとしている。



そういう意味で現在我々は「涸れる井戸」を掘っているとも言える。井戸というものは本質的に涸れる可能性を持っている。「絶対涸れない」と各国NGOが自信を持って何カ月もかかって掘ったボーリング井戸が次々と涸れていく中、我々は敢えて住民達の手による「涸れる井戸」を造り続ける。住民達は、かつて大仰なNGOが残っていた形の良い井戸が、まさかこんなにもあつけなく涸れてしまうとは思ってもみなかったであろう。早魃初期のあの混乱の大きな原因は、NGOが持っていた井戸そのものに対する認識の甘さであったと言える。彼らは井戸が涸れることに対して何ら関心も対策も持っていなかった。

だから我々は、井戸はいずれ涸れ行くものとして、涸れた後住民達が戸惑うことなく自分達で再生できる技術を道具とセットで残していく。

今日にでも水が必要な住民達の前では、完成まで最低四カ月かかるボーリング井戸が適切な援助だとは思われない。このような緊急期において本当に現地で役に立つのは、機械信仰に酔っている横柄な救援の手ではなしに、住民達の伝統と文化の力を背景にした、共に何かを成し遂げるために働く誠意の心に他ならない。

我々は中村医師の誠意ある行動に賛同する者である。また彼の一言で始まったこの試みが何十万もの人の生活を救った事に感動を禁じえない。現地でスタッフとしてこの誠意ある事業に参加でき、また喜びを現地の住民と分かち合うという最高の榮譽を感じる機会を与えていただいたことに深く感謝する。

現地での作業はこれから本格的な拡大期に入る。早魃の影響はすさまじく、せつかく掘った井戸の幾つかは既に涸れてしまったため、何度目かの再生作業に入った。



数年越しの早魃に住民の四割が難民化してしまった郡があり、これからその難民を呼び戻すべく作業を開始する。我々の装備は未だ充分とは言えないが、働いているスタッフの顔はやる気に輝いて見える。

作業はまだまだ続く。そしてその度に悲劇の数は確実に減っていく。それを目の前にしている私はただただ協力をお願いする気持ちで一杯である。

現地での活動を支えていただいている多くの寄付者の皆様にこの場をかりてお礼の言葉を送りたい。寄付を続けていただくことは、現地で活動するより勇気が必要なことであると思う。私達もその勇気に応えるべく、全力で邁進したいと考えている。

本当にありがとうございます。

